View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

翻　訳

コーナーにある居場所（第３章〜第５章の抄訳）

Elijah Anderson ／有里典三 訳

【文献解題】

Ⅰ　はじめに――本書の位置づけ

以下の翻訳は，1978年に発刊されたイライジャ・アンダーソン（Elijah Anderson）の処女作（Ph. D. 論文にあたる）『コーナーにある居場所』（*A Place on the Corner : A Study of Black Street Corner Men,* 1st edition, 1978 ; 2nd edition, 2003）の３章〜５章 pp.55−178の抄訳である。本書は初版刊行から25年後の2003年に改訂第２版が出版されているが，34年たった今も都市社会学・都市人類学の分野における黒人ゲットー研究の基本文献として頻繁に引用されている。学術書としては，すでに当該分野の古典としての評価が定まっている。本書は，William F. Whyte, *Street Corner Society,* 1943, Cayton, Horace, and Drake, St. Clair, *Black Metropolis,* 1945, Herbert Gans, *The Urban Villagers,* 1962, Elliot Liebow, *Tally's Corner*, 1967, Gerald Suttles, *The Social Order of the Slum,* 1968, Hanners, Ulf, *Soulside,* 1969, William, Kornblum, *Blue Collar Community,* 1974. など現代のアメリカを代表する都市エスノグラファーたちの研究と同じ系譜に位置づけられる作品であるが，現在のアメリカの大都市で最大の社会問題となっている黒人男性のストリート・カルチャーに真正面から切り込み，部外者（特に中産階級の白人）には見えない都市下層階級の生活世界と意味秩序を参与観察とインタビューを使って忍耐強く，そして克明に解読した第一級のエスノグラフィーとして独自の存在感を示している。

Ⅱ　Elijah Anderson の研究目的と方法

著者のイライジャ・アンダーソンは，1970年から73年までの３年間にわたって，シカゴ市内のサウスサイド地区（＝黒人ゲットー）にある「ジェリーの店」と呼ばれたバー兼酒屋に出入りし，その店の常連客であったおよそ55人の街角の黒人男性たちを対象に参与観察と聴き取りを行った。「ジェリーの店」は荒廃した建物の中にあったが大通りの角に位置していた。そこは労働者階級や非労働者階級の黒人男性や，近隣や近隣以外の場所に住む黒人男性の【集まりの場】（gathering place）になっていた。『コーナーにある居場所』の目的は，そのバー兼酒屋や周辺の黒人ゲ

ートーで【地域的な階層システム】を構成している一般的な要因を探り出し，彼ら独自の生活世界と意味秩序の特徴を質的に解読することである。

イライジャ・アンダーソンはシカゴ大学社会学部の大学院に学び，そこで【シンボリック相互作用論】の分析方法を習得しているが，本書でもその方法を使って黒人男性たちの【集まりの場】や黒人ゲットーにみられる【地域的階層システム】の構成要因あるいはサブカルチャーの特徴について鋭い分析を行っている。それは具体的に言うと，『ジェリーの店』に常時出入りしている黒人男性たちの社会的相互作用を，彼らの言葉づかい，会話内容，身振り，顔の表情，外見のような【さまざまなシンボルを媒介にした意味のやり取りの過程】と捉えて分析することに他ならない。特に本書では，３年間におよぶ参与観察によって集められたフィールドノーツから豊富なエピソードを選び出しそれらを証拠として踏まえながら，社会組織とその構成要素についての争点，すなわち，社交性，地位，アイデンティティ，信念，そして価値についての基本問題を質的な観点から解読している。

Ⅲ　本書の社会学的貢献内容（1）

本書の社会学的貢献内容について簡単に触れておきたい。一つは，地位や社会集団についての一連の概念的な研究成果を提示している点である。『ジェリーの店』は街角の【黒人男性たちの居場所】（their place），重要な【集まりの場】，一種の【クラブハウス】として位置づけられる。その【集まりの場】は，彼ら自身の社会的ルールや標準的な礼儀作法（propriety）を作り上げ，維持するための舞台装置として重視されている。彼らがより大きな黒人社会や白人社会からの絶え間ない注視から逃れ，くつろぎ，ありのままの自分でいられるのはこの舞台装置の上である。また，そこは自分という存在が他者にとって重要だとわかる場所であり，彼らのことを気にかけ彼らの意見に耳を傾けてくれる人びとがいる【黒人男性たちの居場所】でもある。アーヴィング・ゴフマンが，その舞台装置を「特赦」（remission）の一つ，すなわち社会にとっての【舞台裏】として言及したものに相当する。そして，常連客の黒人男性たちがジェリーの店でたむろするという行為は，基本的に自分たちの【地域的階層システム】を構成もしくは再構成する人間的なプロセス，すなわち完全な【外面的場面】（front stage）に参加することを意味している。

彼らが日常的に社会的相互行為を繰り返す内に，自分たちの【居場所】（place）や【位置】（position）を求めて張り合っているときに，【ワインヘッドたち（＝飲んだくれの男たち）】，【フードラムたち（＝ゴロツキの男たち）】，そして【レギュラーたち（＝良識のある男たち）】という下位グループ（subgroups）の存在が明らかになった。このグループかあのグループか，常連客の男たちが［３つの内の］どの下位グループを自分と同一視するかは，一般社会が多少なりとも評価している資産（＝貨幣）を彼らがどのように統制するかにかかっている。こうした状況の中で，【拡大第一次集団】（the extended primary group）の基本的な輪郭が浮き彫りにされる。集合的行為，地位，そして社会階層の結果はことごとく流動的である。ここでの地位は，羽振りが良くなったり落ち目になったりする男たちとの間の社会的相互作用の

中かそのプロセスにおいてのみ存在し，店にいる他者が黒人男性たちのことをどう考えどう受け入れるかにかかっている。

Ⅳ　３つの下位グループと拡大第一次集団（本書「第７章」より引用）

「ジェリーのバー兼酒屋に入り浸っている男たちは，自分たちのローカルでインフォーマルな社会的階層システムを形成するようになった。男たちがジェリーの店に集まってくるのは，交際のためだけではなく社会的認知と尊敬を得ようとして張り合うためでもある。ほとんどの常連客にとって，ジェリーの店はひとかどの人間になるための居場所なのだ。なぜなら，グループのメンバーたちがお互いにとって重要な存在だからである。このインフォーマルなシステム内の地位は，行為に重点を置いた不安定なもので，グループの他のメンバーのことをどう考え，何を話し，何を行うかによってほぼ決定される。その男の地位は，彼が何についてあるいは誰についてうまく主張できるかどうかで決定される。その男がどの程度の地位にあるかは，他者が彼に対して示す服従や評価によって知ることができる。個人的な自由のやり取りがそのまま社会秩序を映し出す実況放送になっている。社会的認知や評価を追い求める際に，グループのメンバーは自尊心に見合った行動をとろうとする。彼らは利用できる手段を使って他者を出し抜こうとする。すなわち，たいていの場合，インフォーマルな社会階層システム内部の他者に注意を向け，その男がワインヘッド，フードラム，レギュラーといった下位グループの行動規準を満たしているか否かを判断して，その男を出し抜こうとする。競争による地位やアイデンティティの追求を通して下位グループが現れる。それはちょうど，男たちが一方に味方しようとしたり，一定の男たちには反対しそれ以外の異なった『種類の男たち』と意気投合するのと同じである。こうしたプロセスの中で，彼らにとって何がふさわしい地位なのかという問題も付随して起こってくるが，ジェリーの店内のグループに一定の拡大したヒエラルヒー的特性が見られるようになる。」

「グループのメンバーたちが交際しようとするのは，そのグループの中で自分たちについての一定の見方を裏切らない他者である。その際に，さまざまな地位に基づいた中核的なグループを形成し，それらが集まることによって，私が拡大第一次集団と呼んでいるものが形成される。その男にとってどの地位がふさわしいのかという問題（the issue of status）は，どのような仲間との交際を選択するかによって解決される。……彼にとって何がふさわしい地位なのかは，誰のことを，どのように，どんな男たちの前で話すことができる人間かを検討すればわかる。［自分にとってのふさわしい地位が］間違っていることがわかると，その男は他人の意見に従うのが普通である。ジェリーの店内で形成された拡大第一次集団の中では，男たちの行為は，集合的プロセスに部分的に作用する独立したパーツとみなすことができ，そのプロセスの中で社会秩序やそこでの居場所が定義され形成される。本書で議論したように，ジェリーの店で空間を共有している男たちの集合行動は，拡大第一次集団の内部で階層（rank）やアイデンティティを決めるにあたって重要となる。私のフィールド・ノーツにくまなく記録された事例は，ジェリーの店内で形成され

た拡大第一次集団の男たちが，彼らの集合行動を通して，全員が社会的ヒエラルヒー（the social hierarchy）の維持に貢献していることを示唆している。そこには社会秩序が存在しているのだ。なぜなら，男たちが自分の居場所にとどまるからであり，他の男たちも彼らをその居場所にとどめようとするからである。その結果，地位を核としたグループが形成されるが，その男たちは，敵対している人や事象によって周囲の者に少しは知られている。男たちは社会的尊敬と評価を勝ち取ろうと張り合っているため，さまざまな下位グループの中にも個々人の中にも，ある程度の対立が存在している。だが，グループの男たちがお互いに十分に気配りをしながら競争をすると，とりわけ一般社会［の黒人や白人たち］とぎくしゃくしている間は，男たちの行動もお互いに親密かつ保護的なものになるだろう。そのグループが拡大化し階層化するようになるのは，まさしくこの親密な出会いによって生じる競争的な性質のためである。その結果，形成されるヒエラルヒーや地位の点で，とりわけ拡大した集団内部のヒエラルヒーや地位が状況的に変化しやすく不安定な性質をもっている点で，この拡大第一次集団はクーリーの第一次集団と明確に異なっている。」

Ⅴ　本書の社会学的貢献内容（2）

もう一つの社会学的貢献内容は，歴史上の特殊な時代に，皮膚の色と貧困とによって社会の周辺的な地位に追いやられた黒人男性の実態を詳細に描いている点である。1970年代初頭の大都市インナーシティ・コミュニティは今日のそれと比べると比較的穏やかであった。しかし，80年代に入り製造業部門が米国の都市部から次々に撤退し脱工業化都市段階に入ると貧困の原因がますます構造化する。それにともなって，インナーシティ・コミュニティの衰退・空洞化が一段と深刻になっていった。麻薬の売買，ストリートの犯罪，詐欺，賭博が都市のインナーシティ・コミュニティでますます広がっていく。ストリートの世界とディーセントな世界との深刻な緊張関係がより一層シャープに示される。イライジャ・アンダーソンがその後に出版した『ストリート・ワイズ』（1990年）と『ストリートのコード』（1999年）の二作は，ともにフィラデルフィアを対象とした研究であるが，多くの点で『コーナーにある居場所』（A Place on the Corner）の中で輪郭だけを示したイシュー，とりわけ【対照的な下位グループと拡大第一次集団についてのイシュー】と【レギュラーの良識的な行動様式とフードラムの反社会的な行動様式（＝逸脱と暴力）についてのイシュー】をさらに徹底的に掘り下げた研究であることがわかる。

たとえば『ストリート・ワイズ』では，黒人の疲弊したコミュニティと人種が混ざり合いミドルからアッパーミドルまでの階層を含むもう一つの対照的なコミュニティが，どのようにして同じ地域で共存し，公共の空間の取り決めを行っているかという問題が，70年代半ばから80年代後半までのフィールド調査を通して追及されている。一方，『ストリートのコード』では，【個人間の（対人関係における）暴力の社会文化的な力学】（dynamics）を民族誌的に記述することに力点が置かれている。この個人間の暴力こそ，80年代から90年代にかけて米国の都市部にある大多数の近

隣住区の生活の質を蝕んでいる最大の社会問題となっている。特に，インナーシティに住む若者たちの間の暴力は，21世紀に入ってさまざまな階層と人種の若者を巻き込んだ国家的規模の問題になっている。何故これほど多くのインナーシティの若者たちが，お互いに正当な理由のない攻撃と暴力を行使しようとするのか？　イライジャ・アンダーソンは，この疑問がきっかけとなって，最近ではインナーシティの黒人ゲットーにみられる公共の生活，とりわけその公共的な社会組織の性質に研究の焦点を移している。

Ⅵ　主要な価値と残余的な価値（本書「第７章」より引用）

「ジェリーの店の拡大第一次集団の内部では，「安定した生活の糧を得るための手段」や「良識があること」が主要な価値のようである。一方，「タフである」「大金を得る」「ワインを手に入れる」，そして「何か楽しいことをする」は，残余的な価値である。つまり，良識的な行為を支える「小道具」（props）が何らかの理由で，実行不可能だとか，役に立たないとか，達成しがたいと判断したのちに，グループの男たちが受け入れる価値である。ある一定のグループが共有している主要な価値を男たちが実現できなくなると，そのグループに特有のアイデンティティを維持する上で，残余的な価値がより重要になってくる。一般社会とはこの点で密接に関連している。というのは，一般社会との関連でフードラムとレギュラーを比較すると，一つの重要な違いは，仕事に対する志向性すなわち「安定した生活の糧を得るための手段」に関してである。レギュラーには就業傾向があるが，フードラムやワインヘッドにはそうした傾向はない。ストリート・コーナーでは，これが原因となって生活スタイルや自己呈示をめぐって重大な食い違いが生じることになる。レギュラーは少なくとも［仕事に就く］チャンスがあることを自慢し，自分たちが「良識派」であり「人生観」をもっていると自己呈示する。たまり場で始終うろついているワインヘッドやフードラムは，一般的には［レギュラーに］服従している。というのは，彼らは一般社会の階層システムの中で支持され，そのシステムに基盤をもった仕事の有無をめぐって，否応なくレギュラーと比較されるからである。」

Ⅶ　逸脱と社会統制（本書「第７章」より引用）

「拡大第一次集団の内部で社会統制の基礎を形成するのは，まさしく敬意あるいは心理的報酬として与えられるこの条件付きの評価である。社会的に認められた行動をとらないと，ワインヘッドであれ，フードラムであれ，レギュラーであれ，自分の仲間とトラブルになる危険性がある。仲間の男たちとのトラブルは，狼狽，あざけり，誤解といった形をとって起こる。そのために，グループ内での地位を失う可能性もある。

トラブルが起こるのは，あるグループの男が元の居場所から逸脱しつつあると思われるとき――その男がみんなで同意した境界や地域的な階層システムの正当性を尊重していないと思われるときである。脅迫されたと感じた男は，通常は意図的に嘲笑したり正面から争うことで，仕返しをするか「事態を正そう」とするだろう。

だが，こうした状況下でこそ，一定のグループの男たちは，逸脱者がめざす［目標としての］人物像や性格とグループの男たちが証明できると思う実際の逸脱者の人物像や性格との間に大きな不一致が存在することを示して，逸脱者に「不満をまくし立て」ようとするだろう。こうした戦略をもってしても逸脱者を「更生」させることができなければ，その時はもっと直接的な方法，おそらくは暴力を使うはずである。社会統制を維持する際に，こうした個人的属性をめぐる競争やそれに付随して起こる内紛の脅威がどれほどの影響をもたらすかは，観衆（audience）の特性によってほとんど左右される。――すなわち，観衆がその個人（逸脱者）をどう定義するのか。観衆が加わることによって地位をめぐる競争がどうなり，その結果，個人の定義がどのような影響を受けるのか――によってほとんど左右される。」

（以上，訳者による文献解題）

【抄　訳】

第３章
Ⅰ　レギュラーたち（良識のある男たち）

ジェリーの店では，定期的に店に通ってきて特権的な集団の内部で社会関係を営んでいるという意味で，拡大第一次集団に属するすべての男たちが「レギュラー」である。だが，その拡大第一次集団の中に，はっきりと区別されたカテゴリーに属する小グループの男たちが現れた。彼らは自らを「レギュラー」と呼んでいるし，他の人たちからもそう呼ばれている。こうした人たちは，尊敬に値する人間の役割を演じている。特に，拡大的第一次集団に属する他のカテゴリーの男たちから，ひとかどの男として扱われることを望んでいる。一般に，こうした男たちは他のカテゴリーに属する男たちよりも年上で，およそ35歳から70歳までの範囲に及んでいる。彼らは常勤で働いている。そのことが彼らにとっての主要な社会的価値となっている。他のどのカテゴリーの集団よりも，彼らは喜んで常勤で働き，また常勤で働き続けることができる。レギュラーたちのことを，できるだけ残業をして長時間働けるチャンスに跳びつく「勤勉な男たち」と見なしたり，そのように紹介する人が多い。中には二つの仕事を掛けもちしている者もいる。さらに重要なのは，彼らが，高級車，家，高級家具のような「大切な何か（something）を所有する」ために努力している点である。――通常，それらの商品は，購入を目的として働き，長期間にわたって支払いをするぐらい価値のあるものである。レギュラーたちの中には，安定した核家族制度を維持していることを誇りに思っている者が多い。そして，家族のメンバーとりわけ子供たちのために，「良識のある」行動をとり，社会的な地位を向上させたいと願っている。また，少数ではあるが，家族といっしょに

教会のミサに参列して，おそらくは日曜日にゴスペルを合唱している者もいる。ジェリーの店の他のカテゴリー集団と比較すると，レギュラーたちは社会的にも経済的にもずっと安定している。彼らの価値システムは，「良識のある行動」という一言で要約できるかもしれない。良識的な行動という概念にしたがって他者を判断し，自分たちと同類だと思う者のためにこの概念をとっておく。彼らの行動基準を満たすためには，他のカテゴリーの人たちは常勤で働き，「相手をきちんと扱い」，「タフな性格で」なければならない。しかも「重要な存在」，「周囲の者にとって価値のある存在」でなければならない。レギュラーや他のカテゴリーの人たちからこのような積極的な評価を勝ち取るためには，「レギュラー」というラベルを与えられることであり，社会的相互作用を行っている間は，拡大第一次集団の内部でレギュラーの一人になることである。

第４章
Ⅱ　ワインヘッドたち（飲んだくれの男たち）

(1)　ワインヘッドから遠ざかろうとする時に起こる問題

レギュラーや自分がレギュラーだと思われたい人は，誰かを［ワインヘッドという］残り物のカテゴリーに入る人間として名指しすることによって，社会的ヒエラルヒーの中の“犠牲者”を作り出している。もっと言えば，レギュラーたちは彼らを犠牲にして，拡大第一次集団の中での自分たちの地位を確立しようとする。そして，ワインヘッドというレッテルを貼り，彼らの失敗やいたらなさについて噂を立てる。レギュラーとその他の人たちは，ワインヘッドは社会の価値観や基準に“無知”であるか，“頓着しない”という考えをもっていて，実際にそのような点を彼らから見つけ出す。レギュラーたちから見れば，ワインヘッドは自立した生活を築くことができない哀れな存在なのである。このようなレッテルを利用して，レギュラーたちはワインヘッドに，社会に適応していくための訓戒をたれたり指導をしたりする。しかし，このようにしてレッテルを貼り，それを理由付け，色々と難癖を付けることによって，ワインヘッドたちがその基準に届くのをより一層難しくしている。レギュラーたちが，彼らを色眼鏡で見てそのようなレッテル貼りをしているので，なおさらである。

“無知”あるいは“無頓着”というレッテルは，レギュラーたちがワインヘッドのいたらなさについて語るときの重要な常套句である。レギュラーたちは，時おりこの言葉を他のレギュラーたちに対しても使うことがある。この言葉は，レギュラーたちが信奉する価値観や規範から著しく逸脱した言動を，一言で片付けてしまう一種の包括的な表現なのである。このようにしてワインヘッドやその他の人を定義し分類することによって，レギュラーたちは，拡大第一次集団の中で社会的ヒエラルヒーに対する自分たちの解釈を脅かす存在を遠ざけ彼らから距離を置くのである。

こうして［ワインヘッドを］のけ者にすることで，拡大第一次集団の中で，［レギュラーでもフードラムでもない］残り物としてのカテゴリーをはっきりさせる。ひとたびこのようなカテゴリーが，レギュラーとは違うカテゴリーとして作られ明示され使われるようになると，レギュラーたちは安心し，今度は彼ら自身の品行の基準を少し下げてもよいと考えるようになる。つまり，レギュラーたちは時おり，ワインヘッドのレッテルを貼られてもおかしくないような，彼らとほとんど変わらないような言動をすることがある。“レギュラー”としての言動は，以下のようにとらえることができるだろう。レギュラーとしての地位が脅かされている時に，レギュラーだとみなされるような立ち居振る舞いをすること，あるいは良い機会があれば，自分はレギュラーであると皆に明示し，その理由づけをして，そしてこれが最も重要なのだが，［ワインヘッドとは違うと］区別することである。

物乞いをしたり，公の場で“水をまく”ことは，ワインヘッドのレッテルを貼られることにつながる。しかしこのような行為によって，必ずしもワインヘッドという地位を与えられるわけではない。ワインヘッドの地位は，その個人のワインヘッドたる性質や，その時の状況によって決められる。ワインヘッドというグループについて，皆で“話す”という集団行動によって，個人が特定され社会的な地位が決められる。それだけではなく，レギュラーたちの地位やその基準も明確にされる。このようにして，それぞれのグループ分けをより一層強固なものにしているのである。

レッテルを貼り，その説明をし，誰がワインヘッドか指し示すことによって，レギュラーとワインヘッド以外の人たちは，自分たちとは違う階層の人々を作り出すことができる。ジェリーの店の社会的ヒエラルヒーは，誰が，誰に対して，誰がいる時に話せるかによって決まってくる。ゆえに，その権利を獲得できるかどうかが彼らにとって重要になる。会話でどちらかに加わった人は，反対側の価値観や存在について，自分が加わったグループと「共謀して」言いたいことが言えるようになる。

このようにレギュラーやワインヘッドから距離をおいてレギュラーとして見られたい人は，ワインヘッドについて“語る”ことで，人々をグループ分けする。そして，自分たちがワインヘッドではないことを示そうとするのである。レギュラーとその他の人たちは，レギュラーの良識とは相いれないワインヘッドにまつわる笑い話や嘆かわしい話をすることで，彼らとの違いを明確にしようとする。こういった話や話し方は，ワインヘッドに対して極めて批判的である。

スパイダーの発言は，レギュラーとワインヘッドの間にいる地位の人でも，自身をレギュラーとして見ることを許されていることを表している。だが，それだけではない。レギュラーとしての品位に欠け発言権もあまりない人が，自らの地位を支えるのにどれほど他者から利用されるか，ということも表している。品位を決めるのに大切だと見なされる基準は常に変化する。それは，他人を攻撃してでも自らの地位を上げようとする人たちによって，その時々において変化するものだからである。また，その状況を作り出している人が誰であるかによっても，品位の基準は変

化する。それは椅子取りゲームのようなもので，勝者に与えられる賞品は地位の向上である。レギュラーとしての品位に欠ける者にはないような性質を自分は持っているということをいかにうまく皆に印象付けられるかどうかで，拡大第一次集団の中で地位が向上するか否かが決まってくる。

しかし，その地位に特有の性質や品位は完璧に定まっているわけではない。それは，不安定なもので，状況に応じて変わっていくものである。この不安定さに対応する一つの方法は，地位が向上したことを皆にうまく印象付けることができる者に近づき，その周りにいることである。そのために，集団に加わって，レギュラーの品位の基準から著しく逸脱したメンバーやその行為に対し非難を浴びせる。それがどれくらいレギュラーの規準や規範から外れているか皆で話し合い，自他ともにそれを明確にするのである。誰かをのけ者にし，蹴落とすことで，自分自身はより良い方の側，すなわち［レギュラーの］基準を持っているメンバーの側に付こうとする。全てのケースでそうなるわけではないが，こうしてワインヘッド［というカテゴリー］は，レギュラーとレギュラーになりたいと思っているそれ以外のメンバーの手によって意識的に作られると言えるだろう。

この時，共謀してレギュラーになろうとしている人たちの経歴は，あまり問われないようである。それよりも皆の注意は，一つ一つの言動と，それらがレギュラーとワインヘッドのどちらにあてはまるかに向けられている。このような状況において，自分の地位を向上させレギュラーになろうとしている人は，自分がレギュラーの基準を満たす言動をしていることを認めてくれる人を探すのに躍起になる。このようにして集団の中で地位を決める行為が一段落すると，自分はレギュラーとしての品位を持っていると皆に主張し始めるメンバーも多い。それは，レギュラーとワインヘッドの間に位置するメンバーでも，一時的にだが，レギュラーと見なされることが可能だからである。こうしたレギュラーの下位集団は，地位を決める集団行動が行われている際には，一時的な助けとか味方としてレギュラーから受け止められる。もし，レギュラーを定義づける上で，より［レギュラーに近く，味方として］頼れるメンバーがそこにいるのであれば，もっと厳格で高い基準がその場で採用されるだろう。そうなると，ワインヘッドや，レギュラーとワインヘッドの間に位置するメンバーの数が増えることになるだろう。

⑵　ワインヘッドの社会的相互作用における立ち位置

ワインヘッドたちは，レギュラーたちがその場にいる時に行使する，“礼儀正しさ”の基準にもともと合わせることができないため，仲間内だけで集まることが多い。もしレギュラーやその他のメンバーたちと関わらざるを得ない時は，文句をいわれたり，自分たちの立ち位置について言い聞かされたりしないように，［自分たちの方から］口を開かずおとなしくしている。ほとんどのワインヘッドは，ワインを買うのが目的でジェリーの店に入ってくるので，［店内のバーに留まらないで］すぐに外にいる飲み仲間のところに戻っていく。したがって，レギュラーの方からワインヘッドに出て行けという必要はほとんどない。このように振舞うことで，ワ

インヘッドたちは拡大第一次集団の中で決められた地位の妥当性を了承し，それに敬意を払っていることを示すのである。まとまった数のレギュラーやその他のメンバーたちが公園や路地や道端に姿を見せると，ワインヘッドがそこから立ち去るのをよく目にしたものである。

ワインヘッドがレギュラーから離れようとする理由の一つは，彼らも社会的ヒエラルヒーの中の自分たちの立ち位置を知っており，それがある程度妥当であると認めているからである。「ワインヘッドはレギュラーよりも地位が低い」という，レギュラーの評価に異を唱えるワインヘッドはほとんどいない。ワインヘッドの側も，品位があることがいかに社会的ヒエラルヒーや基準や規範を決める上で大切か，ということを理解している。話している相手がレギュラーであればなおさらである。時にはレギュラーたちからそれを思い知らされることもあるが，もともと自分たちワインヘッドには敬意の対象となる資質が不足していることや，レギュラーが主張する“品位”に対して異論を唱えるだけのうまい理由がないことも十分に認識している。ワインヘッドにはレギュラーのような働き口はない。ワインヘッドの中にはレギュラーの下で働いている者もいる。だが，たいていはレギュラーやその他のメンバーたちに物乞いをするしかないのが実情である。ワインヘッドにはレギュラーが主張する品位に欠けるとしょっちゅう指摘されているので，彼らもそのことをよく心得ている。レギュラーが定めた“品位”の定義に議論を吹っ掛けようとするワインヘッドはほとんどいないので，彼らはいっしょにいて精神的に落ち着く仲間のワインヘッドとつるむようになる。

ワインヘッドたちにとって，“品位”の基準を満たしたり，その基準に近づくことは実際には難しい。それに近づこうとすればするほど，理解することが困難な捉えどころのないものに思えてくるのである。レギュラーたちは，典型的なワインヘッドは公共の場での礼儀作法に頓着しないと考えている。それに反してレギュラーたちは，一例ではあるが，高い酒を個人やグループで飲めることに誇りをもっている。ワインヘッドたちは，道端で物乞いをして安いワインを飲むことに必死になる。一方，レギュラーたちは，オールド・フォーレスターや，ジム・ビーム，ジャック・ダニエルズ（Jack Daniels）のような高級な酒を買って，ジェリーの店の一角にある酒屋部屋のドアの内側でその酒を飲むことができる。レギュラーたちはこれを誇りに思っているのである。また，典型的なワインヘッドは，公共の場である近くの木やジェリーの店の壁などに“水をまく”ことを何とも思っていない。良心の呵責すら感じていないのだ。この他にも，レギュラーたちの品位の基準に合わないとされるワインヘッドの欠点やいたらない言動がいくつもある。

上記の観察記録からも明らかなように，ワインヘッドたちはレギュラーの使う言葉や接し方の双方を通して，自分たちの欠点やいたらなさを思い知らされる。ワインヘッドたちの目の前で，“無知”“役立たず”と罵られ，何より“ワインヘッド”として蔑まれるのである。［レギュラーが投げかける］このような言葉を通じて，ワインヘッドたちは，ジェリーの店の拡大第一集団の内部で，彼らがどんな地位にいるのか，その地位はどんな扱いを受けるのか思い知らされるのである。

ワインヘッドの私的な権利はごく限られたものでしかない。普通のワインヘッドは，酒を買った後は，ジェリーの店の一角にある酒屋部屋にあまり長く滞在することはできない。ビーモがLCにしてもらったように，［レギュラーから］食事をおごってもらうということもほとんどない。ビーモとLCに起こったように，そのような冒険は，レギュラーたちにワインヘッドとはこういう連中だと再確認させるに過ぎないからである。レギュラーの家に招かれるワインヘッドもほとんどいない。ワインヘッドたちは，レギュラーに対してその給料の一部を保管させてほしいと頼むことがよくあるが，レギュラーたちにとってそれは考えられないことである。レギュラーの誰かがめったにないほどワインヘッドを信用するというのは，ワインヘッドにとって特別の出来事なのである。

ジェリーの店で，レギュラーたちがワインヘッドをどのように扱うかがあらかじめ分かっていても，彼らのほとんどはそれを受け入れるようである。実際にワインヘッドたちの言動を観察すると，レギュラーのようにワインヘッドの地位を［拡大第一次集団の中で］最下位に位置付ける見方を，むしろ積極的に肯定しているようにも見える。ワインヘッドたちは一種の“奴隷根性”に支配されていると言える。ワインヘッドたちは，“レギュラーあってのワインヘッド”となって，彼らのご機嫌を伺う傾向がある。こうした［ご機嫌伺いの］傾向を数多くの場面で目にすることができた。例えば，レギュラーの何人かが，ある午後にジェリーの店の外に立って，三十五番街でもう一杯やるかどうか話し合っていた。そこが荒廃した貧困層の住む地域だということを説明するために，TJは「あの辺りに住んでいる男たちは，ここのワインヘッドよりもたちが悪いよ」と言った。このTJの言葉に異を唱える者は一人もなく，そこにいた数人のワインヘッドたちでさえ何も言わなかった。

ワインヘッドたちがレギュラーと親交を保っていくためには，その価値観にある程度敬意を表さなければならない。レギュラーたちがワインヘッドの悪口を言っている時も，彼らは文句を言わずに聞いている。レギュラーたちの周囲にいて，むしろその話に参加しているように振舞うのである。時おり彼らは自分がワインヘッドではないかのように振舞うが，レギュラーたちが彼らのことを［元通りの］ワインヘッドとして扱えば，その扱いをすぐに受け入れる。ワインヘッドたちは，自分たちがワインヘッドではないかのように振舞えば，彼らに対する悪口や攻撃も受けずワインヘッドというカテゴリーにも分類されないと思うことができるようである。

しかしワインヘッドたちは，自分たちにはレギュラーの資質がないということを，いつでもすぐに思い知らされるということも分かっている。それゆえ，レギュラーといっしょの時は，ワインヘッドたちはあまり口を開かずに静かにしていて，レギュラーたちからあれこれ言われるのを避けようとするのである。ワインヘッドたちは自分の地位を貶められる出来事に遭遇することもある。時には，一応レギュラーではあるが，少し見方を変えてみると，自分たちと類似した状況の人たちから攻撃されることもある。［レギュラーと共謀して攻撃してくる］こうした人たちは，自分に認められている権利を強化しようとしてこうした行為をするわけだが，これが必ずしも成功するとは限らない。なぜなら，レギュラーたちと親交を保っていく

ためには，ワインヘッドの特質をもつ人たちは，自分たちがワインヘッドであるということを自覚していなくてはならないからである。もしワインヘッドとしての立ち位置をわきまえていない言動をすれば，たちまちレギュラーたちから元の立ち位置に押し戻されることになるだろう。この後のレッド・マックのエピソードはそのことをはっきりと物語っている。

第５章
Ⅲ　フードラムたち（ゴロツキの男たち）

(1)　フードラムであることを思い知らせることについて

フードラムたちが自身を，レギュラーとは違うフードラムであると認識するためには，何か具体的な出来事がなければならない。なぜなら，拡大第一次集団の中でフードラムと見られている人は，必ずしも自分がそのように見られているという自覚がないからである。フードラムのほとんどは，彼らを除外しようと思うレギュラーたちか，他のフードラムによって指摘されるまでは，自分がフードラムであるという認識がない。そのように指摘されるまでは，自分はレギュラーと思い込んで人と付き合うのである。フードラムという言葉は，人を軽蔑する時に使われるため，自分のことを指して使うよりは，誰か他人を指して使うことが多い。

1972年の秋に，シカゴの黒人警察官であるマイク（Mike）は，ジェリーの店の拡大第一次集団の中から，彼の個人的な社交クラブのメンバーを新たに探しはじめた。ここで重要なのは，マイクがジェリーの店に来てそのクラブのメンバーを選んでいる時，彼は系統的に，はじめからフードラムを除外して選んだことである。そうすることで，フードラムとされる人たちを他のカテゴリーの人たちから区別したのである。少なくともレギュラーたちの間では，［拡大第一次集団の中の］ヒエラルヒーが存在している。次のエピソードはそれを物語っている事例の一つである。このエピソードの中で，拡大第一次集団は誰がフードラムかということをお互い指摘しあっている。長年ジェリーズの近辺をパトロールしているだけあって，マイクはこの地域と住民人たちのことをよく知っている。この地域の住民たちも，警官の姿をしている時のマイクも，普段着の時のマイクもよく知っている。拡大第一次集団のメンバーの多くは，特にレギュラーたちは，マイクのことをジェリーの店の名誉会員のように思っている。

ジェリーの店では，マイクは“法律”の体現者のように見られている。拡大第一次集団の中で特にレギュラーたちは，マイクのことをそのように見る傾向が強い。マイクがジェリーの店に入ってくると，彼は「何かトラブルはないか」と周りを見渡す。彼が口論を止めさせたことや，ケンカを仲裁したことは多々ある。また彼は，ジェリーの店で拡大第一次集団のメンバーを逮捕することにもためらいがない。身長は６フィート２インチ，体重は235ポンドほどあって，肌の色がとても黒く，警察官の青い制服を着ているマイクはよく目立つ。ジェリーの店の内外で，彼

は“警察官らしく”振舞い，“法律”を遵守する姿勢を人に求める。

マイクとレギュラーたちは友好的な関係にあり，お互いに敬意を払い，共通点も多くあるが，レギュラーたちの中には，マイクからあえて距離を置こうとする者もいる。その男たちは，マイクがたまに行う気まぐれともいえる“法律”の濫用に，全面的な信頼を抱けないのである。彼らはマイクがいない時に，「マイクは自分が特別な力があるとでも思っているのか」。あるいは，「マイクは調子に乗りすぎだ」とブーブーと不平を並べることがある。彼らは，マイクの“その時の気分によって”人を逮捕することに納得がいかないのである。しかし多くの場合に，レギュラーやそうなろうとしている人たちは，マイクがジェリーの店にいると，レギュラーとして振る舞いやすくなるように感じている。レギュラーたちはフードラムたちと話す時にタフに振舞おうとするが，ジェリーの店の中で敬意や礼節を保つためにそうすることが難しい時もある。しかしマイクが店内にいれば，タフに振舞う必要を最小限に抑えることができるからである。

特に問題がない時には，マイクはジェリーの店の社会的地位にそのまま合わせるようにしている。マイクは拡大第一次集団のそれぞれのメンバーが，一定の状況下におかれた時に，どのように行動するのかしっかりと把握することで自身の安全を確保している。ゆえに，仕事の一環として，詐欺師や，盗品を売買する人，売春業者，売春婦，“ギャング”と思われる人，ワインヘッドやレギュラーのことをよく知っている。彼はそうした知識に自信を持っており，“誰が仕事に就いているのか”，“誰がほとんど生活が成り立っていないのか”を把握している。例えば，「レッド・マックは“役立たず”で，なけなしの金をワインやどうでもいいことに使ってしまう。そしてその後は，一晩中泥酔してしている。」「オスカーは自分のことを大物のギャングのように思っているが，実際はインチキ詐欺師程度だ。」「スリーピーは飲みすぎる癖があり，その後は何日もダウンしてしまう。」もし彼にちょっかいを出して怒らせると，「誰にでも本気でケンカを売る」ので，レギュラーたちは「彼に注意を払っている」というように。

もしこういった人たちが，要注意人物で一緒にいて落ち着いていられない存在だとすると，レギュラーたちとはマイクにとって最も気を許せる存在である。彼にとってレギュラーとは，“この辺り”にいるが，それ以外の人たちと違って自分の側にいる存在である。例えば，「TJ はまともな人間の一人である。TJ には良い妻と大きな子供がいて，家族とうまくやっている。悪びれた態度を取ることもあるが，ケンカに深入りするようなことはしない」とマイクは見ている。

マイクにとって，レギュラーたちは社会的に最も近い存在であり，品性や一般社会の価値観を共有している存在である。そしてその価値観で一番大切とされるのが，［安定した］“生活の糧”があるかどうかということである。マイクやレギュラーたちが，“法律”の遵守とサウスサイドに住む良識派の黒人が身に着けている礼節やモラルを強く結び付けて考えるのに反して，ワインヘッドやフードラムというのは，このような道徳的規範に頓着しない。マイクはレギュラーたちから護民官のように見られている。なぜなら，“この辺り”の法律を体現しているマイクがいる

ことで，たとえ“争いごと”が起こっても，レギュラーたちはフードラムのようにタフな一面を見せて品性を損なうことなく，静かにその場が収まるのを待っていればいいからである。同時にマイクは，レギュラーたちのことを，“フードラム”や“ギャング”と戦う自分の同盟者だと思っている。拡大第一次集団のメンバーやストリートにたむろする黒人男性と対処する際に，マイクはこのような知識を仕事に役立て，自分の任務を遂行しやすくしていた。マイクは自分の個人的な社交クラブに新しいメンバーを加える際にも，この知識に基づいてメンバーを探していたのである。

十月の金曜日の夜，マイクはジェリーの店に着くと，彼の社交クラブに入る候補者を一人ひとり“当たり始めた”。その社交クラブというのは，黒人向けのローカルなラジオ放送局 WMPP に所属するギャラント・ジェンツ（Gallant Gents）のことである。この社交クラブの活動には，ダンスや親睦会のほか，ラッフルなどの恵まれない人々への慈善活動も含まれていた。このクラブは，ホワイトカラーや労働者階級の黒人を対象にして自発的に活動していた。

［ジェリーの店内で］酒を売っている方の部屋は，いつもの金曜日の夜のように，給料をもらったばかりの人々でごった返していた。マイクはそうした中に，非番の日に現れた。その日の彼の出で立ちは，黒のセーターに黒の“礼装用のズボン”，そして黒の警官用の“短靴”であった。その上，ピンク色の“サングラス”をかけ，大きな葉巻を口にくわえていた。ズボンの右ポケットが膨らんでいるのは，マイクがいつも携帯しているピストルのせいだと誰もが知っていた。

マイクがジェリーの店に現れた時，その場が一瞬静かになった。店内にいた黒人たちはそれまでしていたことを一旦止めて，マイクの方を向いた。マイクが現れるまでは，TJ は LC とカルビンを相手に，ダウンタウンの映画館で上映されている黒人映画を見に行く価値があるかどうか議論していた。だが，彼らの議論はそこで止まった。レッド・マックは，ポープに“酒”を飲むための金を“せがんで”いたが，それを止めてポープと一緒にマイクの方を見た。酒を売っている側の部屋の動きが，すべて［マイクが現れたことによって］何らかの影響を受けたようだった。マイクは近くにいた男たちに“話しかけ”，挨拶をすることで，その存在を周りに知らしめた。カウンターまで来ると，ジェリーに何か新しい“ニュース”がなかったか質問した。マイクとジェリーが話しはじめると，それを見ていたレギュラーやワインヘッドの何人かは，それまでしていたことを再開した。だが，マイクの存在を気にかけながらであった。彼の存在が，その場にいた黒人たちに，社会的地位を強く意識させたことは明白だった。彼が勤務時間中であろうとなかろうと，ジェリーの店内にいる黒人たちは彼を警官として見ており，彼と距離を保って接していた。

ジェリーと数分話した後，マイクはレギュラーであるポープの方へ歩いて行って，彼の社交クラブに入らないかと“尋ねた”。マイクとポープから二，三フィート離れて，私はピーウィー，レッド・マック，ホーミーの三人と会話をしながらそれを見守っていた。ミスター・トンプソンはトイレに行くまではポープと話してい

たが，トイレから戻ってくるとポープはすでにマイクと話していた。マイクはポープにそのクラブの案内状を見せ，活動内容を説明していた。

ポープが「いや，マイク。オレには無理だ」と言っているのが向こうから聞こえてきた。老トンプソンはそうしたやり取りを礼儀正しく見守っていたが，自分がその会話に入っていないことを知ると，すぐに私たちの輪の中に入ってきた。マイクとポープはその後も話していたが，しばらくするとマイクはジェリーの店を出て行った。

これがマイクの新メンバーを集める試みの始まりだった。二，三日も経たないうちに，多くの黒人男性が彼の社交クラブに入らないかと誘われた。マイクに誘われた黒人男性は皆レギュラーだった。マイクにとって彼らは，“安全”で比較的信用できる人物であった。そして彼らは，“社交クラブ”の“有力者たち”の目からみても，マイクに“泥を塗らない”男たちだった。レギュラーたちとは違い，フードラムやワインヘッドのほとんどが，マイクの眼鏡にかなわなかった。その理由は，彼らが年会費の五十ドルを払えないだけでなく，“その場にふさわしくない”人物とみなされたからである。マイクは，その社交クラブでうまくやっていけそうな，そして会員からも認められるような人物を選んで誘っていった。そして，誘われた男たちは，結局はレギュラーの面々だったのである。

多くの男たちがその社交クラブに誘われたが，結果的に入会したのは三人だけだった。マイクに誘われただけで気を良くした黒人男性もいた。レギュラーの中でも，TJ，オーティス，ハーマン等がその社交クラブに入会した。ある日，ハーマンがマイクの社交クラブに入会した理由を話してくれた。

> 「オレはマイクの誘いをうまく利用させてもらうことにしたのさ。オレはその社交クラブに入りたいと思った。マイクはレギュラーたちを選んで誘ってたしな。それもれっきとしたレギュラーたちだけだ。ちゃんと仕事に就いている奴らさ。そういった人間をマイクは選んで誘っていたのさ。マイクは，その男のことをよく知っているかどうかは気にしていなかった。もし誰かがその社交クラブに入りたければ，会員たちは『どうぞどうぞ』と言うだろう。『あなたとお近づきになりたい。ですが，その前に知りたいのは，あなたが仕事に就いているかどうかなんだ。』働いている人間には敬意が払われる。それが安定した仕事であればなおさらだ。仕事に就いている人間はほとんどがレギュラーだよ。仕事があれば「～さん」とさん付けで呼ばれる。仕事がある人間は，もめ事やとんでもないことをそうそうしでかしたりはしないからね」。

その次の二，三週間，マイクの社交クラブに入会した三人は，会合や催し物に行く時や，クラブの活動に関連したチケットを売る時などに，いつも皆に呼びかけていた。そうすることで，“立派なこと”をやっているようにみせかけていたのである。クラブの催し物に出席する時などは，直前に“小ぎれいにして”（正装して）ジ

ェリーの店に現れ，そこで一，二時間過ごしてから会場へ向かった。その間，レギュラーたちからはお世辞や賞賛を言われ，フードラムたちからは沈黙か妬みの眼差しを投げつけられた。フードラムたちはその社交クラブを“お堅い人間の集まり”と言い，そのメンバーたちを“堅物”と呼んでいた。あるいは，マイクの“犬”と呼ぶこともあった。その言葉には，マイクが彼らを逮捕すると脅して無理やり加入させたという意味が含まれていた。スパイダー（彼のグループは特定されていない）は，オーティス，ハーマン，TJ がマイクの社交クラブに入った理由を，彼の視点からこう話してくれた。

「要するにあいつらは間抜けなのさ。そうなんだ。オレもその社交クラブに入ろうと思えば入れたんだ。だが，マイクはオレが断るということを始めから知っていた。奴が社交クラブのメンバーを集めていた時に，何をしたか知っているか？　オレのところに小さな用紙を持ってきて，そしてサインさせようとしたんだ。オレはその紙切れを見て，鼻で笑い飛ばして，向こうに行ったよ。そうやってその場を離れたから，マイクはそれ以上オレに何も言わなかったのさ。あんな間抜けどもといっしょに入るなんてご免だ。それに，マイクも卑劣な男だからな。このあたりの黒人たちをかたっぱしから逮捕しちまった。オレは逮捕されていないがね。マイクには近づかないからさ。奴はほんの少しいっしょにいたかと思うと，次の瞬間には逮捕してくるからな。TJ の奴もマイクにおごってやっていっしょに飲んでいたんだが，その時も逮捕されないかとびくびくしていたよ。ある日のことだが，TJ がジェリーの店の真ん前に車を駐車していた。そうしたら，マイクが道の向こう側にパトカーを止めて，TJ が車をどけるのを待っているのさ。オレは TJ に『なんであんな奴と付き合ってるんだ？』と言ってやったよ。そしたら TJ はこう答えたんだ。『今からオレの言うとおりにしてくれ。奴はお前には何もしないよ。オレの車を運転して，向こうのインディアナ通り（Indiana Avenue）に駐車してほしい。そうすればオレも［車を拾って］帰れるからな。』だからオレは，TJ の車を運転してインディアナ通りに駐車した後，こっちに戻ってきて鍵を返したんだ。マイクは，オレが TJ の車を［勝手に］使ってどこかに行ったと思ったらしい。それで，TJ はマイク［を逮捕もせず］いっしょに一杯やっていたのさ。TJ がおごってやってな。だが，もし TJ が自分で車を動かしていたら，次の角にたどり着く前に［すぐに］マイクは奴を逮捕していただろうぜ。そういう奴だから，オレはマイクに近づきたくないのさ。全く卑劣な男だよ。」

その社交クラブ自体は拡大第一次集団の中で重要ではなかったが，マイクによるメンバーの勧誘とその結果は［それぞれの］社会的地位を示すことになった。それは私たちに，拡大第一次集団内部におけるフードラムとレギュラーの相対的な地位の違いをはっきりと見せ付ける結果となったのである。

(2)　悪の道に走るフードラムたち

自分たちのグループだけでまとまって他のグループと接していない時，フードラムたちは，レギュラーや他の人たちがレッテルを貼っているようなフードラムらしい行為をしていることが多い。フードラムらしい行為とは，すでにそう認識されているフードラムたちが［実際に］行っている行為であり，彼らの［そうした］行為自体がその定義を作り出していると言える。しばしばその特質（フードラムらしい行為の特質）は，他のグループの人たち，特にレギュラーになろうとしている人たちによって，おおげさに誇張される。公の場でのギャンブル，“ストリートでのケンカ”，凶器をちらつかせる，詐欺，他のフードラムたちで集まることなど，彼らが［日常的に］やっていることが，フードラムらしい行為の例である。その際立った特徴は，“タフ”で“でかい金”を得る能力があることを示そうとしていることである。これらは，フードラムとみなされた人たちが重要であると考える価値観である。

レギュラーや他の人たちは，フードラムらしい行為を彼らに恐怖や脅威をもたらすものととらえている。レギュラーたちがケンカの強さにあまり価値を置かない理由の一つは，かつては自分たちも体力には自信があったが，今ではかなり衰えてきているという事情がある。しかし，たとえ体力に自信があったとしても，彼らはレギュラーとしての“品位”を保つ方を重視するだろう。何か切迫した事情がある場合を除いて，暴力を振るえば彼らの品位が落ちてしまうからである。品位を保ち，ダウンタウンで前科のない，“きれいな経歴”を保つことは，職に就きそれを継続する上で重要な要因となるため，レギュラーたちにとっては大きな関心事なのである。他の理由も含めて，レギュラーたちはフードラムがタフさを強調し始めると，たいていの場合は身をかわしてその場から離れていく。

これと全く同じ理由で，“フードラム”として見られたい人や，“フードラムのように”見られたい人は，レギュラーたちにとっては“トラブル”と思えるような出来事に意図的に身を染めていく。それが彼らの自尊心を生み出すのである。タフになることによって，フードラムはレギュラーを従わせることができ，彼らに近寄ったり離れたりしながら，フードラムらしい行為を何か価値のあるものと思わせることができるのである。このような状況の下で，“フードラムたち”は“悪びれたり”，“でかい金”をもっていることを賞賛することに価値を見出す。それを認める人が周りに多くいる時や，それを認めさせるために利用できる人たちが周りに多くいる時は，その場の空気が一転する。そうでない場合は，“レギュラーとして振舞える人たち”が，フードラムとは違った振舞い方を考えなければならなくなる。そのような状況の下では，レギュラーたちもフードラムとほとんど同じような行為をしなくてはならなくなる。一つには，こうした状況を避けたいがために，レギュラーたちはフードラムが多く集まってくるとその場から離れていくのである。［それぞれの］地位は不安定なものであり，フードラムたちとは［注意しないと］すぐに関わることになってしまうからである。

フードラムのような行為が多く見受けられるようになると，フードラムとしての

地位を与えられ，フードラムとして認識されることになる。一旦フードラムとして認識された人は，ささいな行為であったとしても，それがジェリーの店のような“荒っぽい”環境である限り，フードラムとしての常識や価値観を示そうとしていると見なされる。しかし，実際にはその行為は，他のグループの行為と重複していたり，他のグループの行為にますます近似したり，時には相反する行為であったりする。このような状況において，フードラムとしてぴったりな経歴や特徴をもった人たちが，彼らの社会的価値を決める尺度として利用されることもある。“レギュラー”としての地位を獲得する際には，そのような過去の経歴や言動は障害ともなりうるが，フードラムとしての地位にはぴったり合う。それゆえ，拡大第一次集団は，紛れもない“フードラム”としての経歴や特徴をもつ人には，フードラムとして自己表現するか，あるいは何もしないように仕向けるのである。

レギュラーたちが“目に見える”形で生活の糧を得る手段を重視するのに対して，フードラムの中には“目に見えない”形で生活の糧を得る手段を重視する者が多いようだ。この傾向は，フードラムたちが仲間内でいる時に特に顕著で，“よく働く人々”のことをバカにする傾向がある。フードラムの多くは長い間失業しているが，たまにカルビンのように“目に見える”形で生活の糧を得る手段をもつ人もいて，そのような人たちは，状況が許せばレギュラーとしての特徴を出せる可能性が高い。仕事に就いているフードラムは，ジェリーの店の周りでそれを自慢することはあまりない。誰が仕事に就き誰が就いていないかは，拡大第一次集団の誰もが知っていることだが，フードラムは仕事について話すことはない。なぜなら，フードラムたちが就ける仕事はレギュラーたちのような“良い仕事”ではなく，たいてい薄給で“きつい”ものであり，当人たちは屈辱感を抱いているからである。それゆえ，フードラムたちは仕事に就こうとしないし，ましてやその仕事について自慢しようなどとは思ってもいない。

フードラムの多くは軍隊か刑務所にいたことがあるので，“不名誉な除隊歴”や“ダウンタウンでの逮捕歴”があることも多い。刑務所にいた“年数”を含むこうした記録は，“良い仕事”に就く時に大きな障害になる。フードラムはどのような仕事なら就けるか，［探す前からすでに］分かっている。低賃金の“きつい労働”である。例えばフードラムたちが日雇い労働をすることもあるが，このことをなるべく周囲に知られないようにする。なぜなら，日雇い労働は，レギュラーたちのような家族を扶養できる安定した仕事と比較すると，とてもお粗末に見えるからである。皆の前ではっきりと言うことはないが，フードラムたちは“よく働く”レギュラーたちに尊敬の念を抱いている節もある。フードラムたちにとっては，ジェリーの店での地位の格付けがある以上，彼らは“目に見える”形で生活の糧を得ようとする以前から，すでに負け戦のように感じているのである。

このような負け戦に見える競争から抜け出す方法の一つは，別の競争に身を投じることである。フードラムたちが置かれた状況に対処するために“目に見えない”形で生活の糧を得ていることを強調する。もし仕事に就いていれば，それを仲間内で話すことをしないか，あるいはいかに嫌な仕事であるかを否定的に話すのであ

る。今すぐ止めるというフードラムもいるが，実際には数週間か数ヶ月の間その仕事を続けるフードラムも多い。“目に見えない”形で生活の手段を得ていることを示すために，フードラムたちはなるべく多くの時間をジェリーの店の周りで過ごそうとする。毎週一，二回仕事を休んで，毎日仕事をしているのではないことを強調するか，「本当ならあの古ぼけた工場に行くより，お前たちとここにいたいんだがな」と言ったりする。

仕事で得たものであろうとなかろうと，フードラムにとって最も重要な関心事の一つは金である。フードラムたちが皆でつるんでいる時はほとんど金の話をしている。拡大第一次集団のメンバーもそれ以外の人々も含めて，彼らは金をもっていると思われる人の話をする。中には独自で金を稼ぐ方法について話すフードラムもいる。彼らは“でかい金”を手に入れた身近な友人のことを，拡大第一次集団の中の知り合い，特にレギュラーたちと比較しながら自慢げに話す。「奴は仕事に就いていないが，でかい金を手にしたぜ」と話すのである。時々“でかい金”を手にした親戚の話をするフードラムもいるが，その時は必要最小限度に情報をとどめる。なぜなら，その話を聞いているフードラムの中には窃盗犯や強盗犯として悪名が高い“要注意”人物も混じっているからである。

売春斡旋業者や，その地域で成功している詐欺師のことが話題に上ることもある。（“簡単に”多額の金を稼ぐ）“やり手のギャング”の話も出る。“でかい金”を稼ぐ手ずるがあった頃を懐かしんで，「その頃は女（娼婦）がいつも自分の周りにいた」とか，「毎年のように新車を買い替える金があったよ」と自慢する者もいる。ジェリーの店の界隈かその近辺で［実際に］“強盗”を働いているとみられているフードラムもいる。だが，今までに誰一人として，それまでに犯した“強盗”のことを自ら話す者はいなかった。

フードラムも含め拡大第一次集団のメンバーは，誰かといっしょに帰ったり，夜にはジェリーの店の近くに車を駐車するなど強盗には用心している。全員が，ジェリーの店に出入りしているメンバーの中に強盗がいることを認識している。その強盗をする可能性のある者が，相手のことをよく思っていないのなら尚更である。このことは，私とハーマンがコーチスとした会話にも示されている。次に紹介する，ミスター・トンプソンが私に話してくれた事件からも，その危険性を読み取ることができる。ミスター・トンプソンは六十七歳になるレギュラーである。

> 「ここらのフードラムのような無骨者には注意した方がいい。冗談なんかじゃない。奴らは本当に狂っているからな。いつかの夜，ジョーンズに起こったことを話そう。［五十歳になるレギュラーの］ジョーンズは知っているだろう？　こうさ。先週末にジョーンズはフードラムたちと出かけたんだ。ジーニー・ボーイ（Genie Boy）とナッキーと他の何人かとね。奴らは［地元のナイトスポットの］バロック（Baroque）に行くと言っていた。それで，他の奴らは皆その店の中に入って行って，ジョーンズとトム（Li'l Tom）だけ車の中に残ったんだ。あの麻薬中毒のトムだ。知っているだろう？　そう

したらトムがピストルをジョーンズに突きつけて「あきらめるんだ」と叫んだ。ジョーンズはおとなしく従って，もっていた十ドルほどを渡したんだ。ジョーンズは［帰ってきてからも］落ち込んでこの辺りを歩いていた。そもそもジョーンズはそこに行くべきじゃなかったんだ。フードラムたちと混じってな。だから奴の責任でもある。もっとフードラムに対して用心すべきだったんだよ。

オスカーの事例で見たように，フードラムの中にはスラム街のストリートや酒場や建物の敷地内などで人を“騙して金を巻き上げる”者もいる。法律に違反しない仕事に就き，“働き者”と見られているフードラムもいるが，中にはレギュラーたちが思い描くような生活をしないで，家族を養うために金を稼ぐ者もいる。フードラムたちは，収入を増やすために，拡大第一次集団のメンバーが“詐欺”と呼ぶ行為を行っている。ここでいう“詐欺”とは，法律で禁じられた物品を仲間や知り合いと取引することを意味している。こうした“詐欺師”は，何かを売ることで金儲けをしようと常に考えている。彼らの中には盗品買い付けの専門家もいて，それを商品として売りさばいて生計を立てている者もいる。

しかしながら，ジェリーの店の近辺に住むフードラムたちにとって，詐欺は副職的なものであり，主な収入源を常勤や非常勤の仕事によって得られる給料か，失業手当や生活保護手当てに頼っている者がほとんどである。詐欺師の中にはストリートで物を売る許可証を所持している者もいて，警察に止められた時にはそれを呈示する。例えば自動車工場に常勤で働いているが，副職としてかなりの額を詐欺で稼いでいるオスカーは，このような許可証をもっている。ほぼ二日に一度のペースで，あるいは売る物が少なくなった時に，オスカーは町の“向こう側”にあるという詐欺師専用の卸売り店に行く。そこで壊れたレコード盤や，（イミテーションのブランドである）“ベンリスト”（Benrist）の時計，靴下，シャツなど見た目は良さそうな品物を仕入れ，彼がたまり場としているサウスサイドやウェストサイドなどで，［騙されやすい］無用心な人に売りさばくのである。

オスカーや他の詐欺師たちは，盗品だとわかっている物を買い，それを売って儲けを得ることもある。あるいは自分で盗んできた物を売る者もいる。「今日これを盗ってきたんだが，買ってくれないか？」「少しばかり金が要るんだが，この靴を五ドルでどうだい？」と言って売って歩くのである。中には金目の物を友人や知人の家から盗んでくる詐欺師もいると言われているので，ジェリーの店の近辺では，自宅にまつわることには特に用心しなければならない。特別よく知っている者以外は自宅に招くことはないし，ほとんどの場合，自宅の住所を他人に教えることもない。

盗品をジェリーの店に直接もち込んで白昼堂々と売るフードラムもいる。それはジェリーの店の近辺の街角では特別めずらしいことでもなく，例えば小型のカラーテレビや，新品のコートや金時計を売っている黒人男性を見かけることもある。ある時など，詐欺師でありフードラムでもあるトムが，二，三ブロック離れた街角か

ら車を盗んできて，ジェリーの店の前でそれを売っていたことがあった。一時間以上もその道端に立って盗難車を売るために［通行人に］声をかけていたが，ようやく買ってくれる人が見つかると，その1966年製のビュイック（Buick）を三十ドルで売り払ってしまった。その夜，トムはフードラムの仲間たちと酒を飲んでその金を使い果たしてしまった。トムに騙された“馬鹿なカモ”を餌にして笑い冗談を言い合いながら。

またある時は，ナッキーがジェリーの店の近くの道を歩きながら，大きめのテレビセット一式を売ろうと苦戦していた。「このテレビを三十五ドルでどうだ？」と叫んでいたが，やがて誰も買う気がないのを見て，十五ドルに値下げし，挙げ句の果てには拡大第一次集団のメンバーが知らない人間に六ドルで売った。ナッキーから少し離れてそれを見ていた何人かのメンバーたちの中で，ポープが小声で「きっと奴はあのテレビを，姉か，叔母か，誰かからかすめてきて売ったんだぜ。あるいは店で知り合った女からか…。言いふらすなよ」と囁いた。他の男たちもそれに同意するように，肩をすぼめたり，隣を小突いたり，クスクス笑った。このような取引の光景を見ている男たちは，詐欺をする人には注意を怠ってはならないと肝に銘じている。

何を置いてもフードラムは，自分がタフだと思われたがっている。フードラムでなくても，拡大第一次集団のメンバーたちは，誰もが“周りの者と同じようにタフ”だと思われたがっている。ケンカを売られた時には，状況によっては，レギュラーやワインヘッドでさえもタフさを示そうとする。しかし，レギュラーやワインヘッドなど，タフさを示すことにあまり重きを置いていない男たちにとっては，よほど挑発されない限り，そうすることはないだろう。しかしフードラムたちは，特に仲間内でいる時は，少し挑発されただけでもそれに反応する。その場にいる聴衆や，ケンカを売ってくる“相手”にもよるが，フードラムたちはいつでもタフさを示す機会をつかもうと準備している。

フードラムは，拡大第一集団の中では，タフさ［を示すこと］については他のグループに比べてある程度優位に立っている。タフさを示す時にはどんなメンバーでも，フードラムに見られるようなリスクを負わなければならない。なぜなら，タフさはフードラムと呼ばれる男の象徴であるからである。タフであることは，フードラムらしい言動をするということであり，それはフードラムが自身を肯定できる数少ない方法の一つである。レギュラーであればひとかどの人物であることを示すもっと他の方法があるし，ワインヘッドの方は［どちらかと言えば］誰かと競おうという気があまりないようである。

フードラムがタフさを示す方法の一つとして，トラブルに対する彼ら特有の姿勢がある。彼らはトラブルを探し求めており，それに真正面からぶつかっていこうとする。レギュラーたちが“立派な”経験を話すのを好むのに対し，フードラムたちは“トラブル”に巻き込まれた際，いかにタフさを発揮したのかを話したがる。例えば，“郡”の拘置所で過ごした夜のことを，あたかも何のスティグマ（汚点）もなかったかのように興奮しながら話すフードラムもいる。彼らはケンカに加わって

こいつやあいつを「やっつけてやった」と気安く話す。そしてこのような話をすることで，自分の地位を示そうとするのである。

フードラムたちの間には，そしてもっと一般的には拡大第一次集団の間には，タフさに基づいた地位のヒエラルヒーが存在している。このヒエラルヒーは，他のグループでもそうだが，不安定で変わりやすく，個々の言動に基づいているものである。このヒエラルヒーを気にし，そこに関わっていく人たちは，何度となく自分がどこにランクされるかを見つけるために，“テスト”し，“挑戦”をしなくてはならない。自分の力を試すためにケンカをして，その結果として，強い者に従うか，あるいは他者を自分に従わせるかのどちらかを要求される。この，皆が共有している社会的な秩序感に背いて行動するメンバーには，誰であれ集団のサンクション（制裁）が加えられる。こうした点はテリーの事例に詳しく描かれている。